

牛久：学校周辺に見る自然

第56号 牛久二小

2013年3月19日発行

＜冬の校庭でさがしてみよう！（植物編）～②冬芽と樹皮＞

2/8、牛久二小4年2組との校庭の植物観察。今回は「冬芽と樹皮」について。冬芽の中には、春に伸びてくる新しい枝や葉、花の赤ちゃんが入っていて、私たち人間と同じように大人よりもずっと寒さや乾燥などに弱いので、芽の中で守られて春を待っているのだということでしたね。そして、冬芽のつくりにも、いろいろな工夫がみられました。



美しい色をした、「重ね着タイプ」のドウダンツツジの冬芽。茶色い花のようなのは、昨年の果実。

上のきれいな冬芽は、ドウダンツツジ。10枚ほどの、うろこに似た小さな葉のようなもので包まれています。「重ね着タイプの芽」と紹介しましたね。茶色い花のようなのは、昨年できた果実です。



左のニシキギも、このタイプ。

15枚前後の「重ね着」のようです。枝に十字に出るコルク質の翼がおもしろいですね。よく見ると、冬芽も十字の位置に、対をなして出ています。翼は冬芽の上から、同じ直線状の次の冬芽の手前まで続いていますね。「錦木(にしきぎ)」は秋の紅葉が錦織のように美しいことからついた名ですが、この翼から、「カミソリの木」という別名もあります。

紅葉が美しいことで知られるニシキギ。枝のコルク質の翼から、「カミソリの木」の別名もある。



ビオトープ池の**アズ**もそうですね。大きな芽と小さな芽が並んでいますが、大きい方が花の赤ちゃんが入っている「花芽(はなめ)」、小さい方は葉や茎の赤ちゃんが入ってる「葉芽(ようが)」です。先端の芽の近くで枝が折られたように見えますが、これは、茎の先端部数 mm が枯れたようになって落ちたあとで、アズの特ちょうの一つなのです。次の年は、この一番先にある芽が代わりに伸びていきます。

「重ね着タイプ」のアズの冬芽。卵形の大きいのが花になる芽、小さいのは茎や葉になる芽。



こちらのまるい大きな芽は、**ツバキ**の花芽。そのつけ根には細長い芽がついていますが、こちらは葉芽です。どちらも「重ね着タイプ」。指で花芽を割ってみましたら、まだ固い感じの芽でも、中にはもう花びらも雄しべも雌しべもできていてびっくりしましたね。

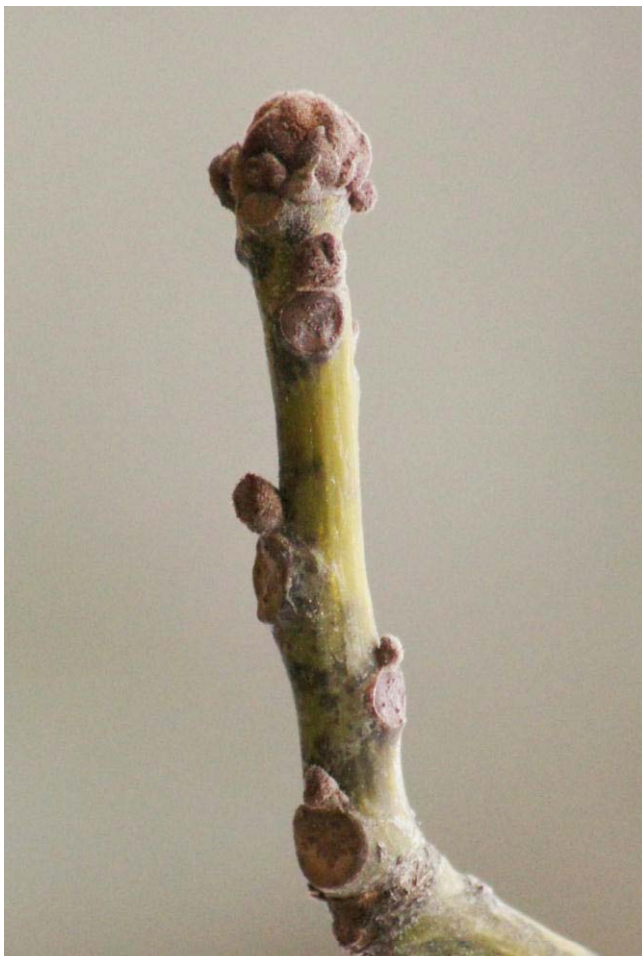


「重ね着タイプ」のツバキの冬芽。まるく大きいのが花芽、細長いのは葉芽。もう、雄しべや雌しべもできている



左は**コブシ**。大きくて毛皮のコートを着ているようなのが花芽で、その少し手前のずっと小さいのが葉芽です。葉芽のつけ根に V 字形に近いものがありますが、これは葉のついていたあと。よく見ると、上で紹介した他の冬芽のつけ根にもありますね。じつは冬芽は、葉のつけ根内側か茎のてっぺんに着くのです。

まるで銀色の毛皮のコートをはおったようなコブシの花芽と、比べるとずっと小さくて、見落としてしまいそうな葉芽。



まん丸な冬芽と葉の落ちあと。「重ね着タイプ」で赤茶色の毛にびっしりおおわれる。アオギリの名の通り枝が緑色。

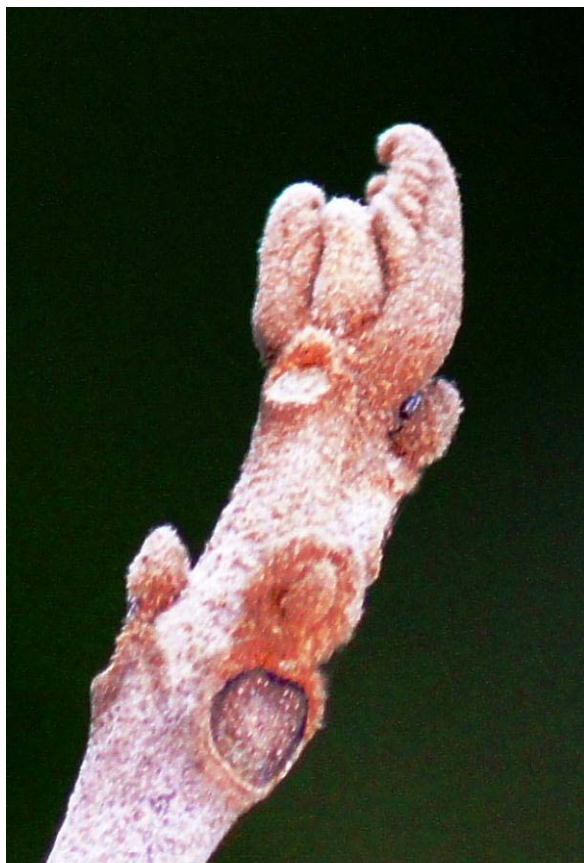
「先生～、芽のまわりを葉っぱが^{かこ}囲んでいるよ～、^{あつた}暖かそう。」と教えてくれたのは、ツツジの仲間、**オオムラサキ**。前の年の葉が全部落ちてしまわずに、一部がてっぺんの芽を包むように残っていました。こういう木を半常緑樹とか^{はんじょうりよくじゆ}半落葉樹などとよんだりしますが、北の地方では落葉樹に、南のほうでは常緑樹に近くなるようです。冬芽だけでなく、まわりの葉も一緒になって、中の赤ちゃんを守っているようですね。**まわりの葉も冬芽を包み込むようにして、中の赤ちゃんを守るオオムラサキ。半常緑樹**といって、葉の一部が残る。



左は**イチヨウ**。先端の茶色のが冬芽です。そこまで、葉の落ちあとがびっしりと重なりそうについていますね。このような枝を短枝(たんし)といい、葉と葉の間隔が^{かんかく}つまっているのが^{どくとく}独特のもようができます。葉がたばになって出ているところは短枝に葉がついていて、茎は毎年少しづつしか^の伸びません。手前の長く伸びている部分は、^{かんかく}ふつうの葉と葉の間隔が^{ちようし}広い枝(長枝)。「重ね着タイプ」のイチヨウ。葉と葉の間隔が^{かんかく}つまり、毎年ちよと^{ちようし}づつしか伸びない短枝(たんし)の先に、小さな冬芽がつく。

こちらの**アオギリ**の冬芽も変わっていますね。葉のつけ根にできた芽はどれもまん丸で、てっぺんの大きな芽は半^{はんきゅうじょう}球状のドームのようです。赤茶色の毛がびっしり生えていて分かりにくいですが、たくさん「重ね着」しています。キリに似ていて、枝や幹が緑色をしているので「青桐(あおぎり)」と名づけられたといわれていますが、葉がキリに似ているという^{せつ}説と白くて軽い材が似ているという^{ざい}説とがあるそうです。広島^{げんばく}を受け、幹が半分焼けても生き残り、^{ふっかつ}復活した木としても知られています。芽の下の丸いもようは、これも葉の落ちたあと。木の種類によって、いろいろですね。





こちらの**ニガキ**の冬芽も、変わっていますね。茶色の毛でびっしりおおわれていますが、てっぺんの芽をみると、手の指ゆびのようなもようがあります。じつはこれ、小さいまま成長せいちょうが止まっている葉で、その小さな葉が毛でびっしりおおわれながら中のもっと小さな赤ちゃんを守っているのです。うろこのようなものに包つつまれず、葉がむき出しになっているので「裸芽ら（らが）」とよんでいます。指のように見えるもようみぞの溝は、じつは葉の脈みやくなのです。二小の校庭内でもそうでしたが、このような芽は日本では少なく、芽鱗がりん（がりん）とよばれるうろこのように小さい特殊な葉とくしゆに包まれたものが多いですね。その他、市内でもよく見られる裸芽しょうかいを紹介しておきましょう。下左は、秋に輝く果実が美しい**ムラサキシキブ**。左に出ている房ふさのようなのは果実の集まりのあとです。下右は**ビワ**。これも葉の脈がはっきりしているし、毛でおおわれていますね。裸はだかでは寒いから、毛でびっしりおおわれて補おぎなっているのでしょうか。



裸芽ら（小さいまま成長が止まった葉に包まれた冬芽）の仲間、ニガキ（上）とムラサキシキブ（下左：2012. 03. 16 牛久自然観察の森）、ビワ（下右：3. 15筑波山）。裸芽は葉の脈みやくが分かり、毛でびっしりおおわれるものが多い。



最後に、**サルスベリ**みきの幹です。サルでもすべり落ちるかというくらい、幹や太い枝がツルツルしていることからついた名ですが、原産地中国では漢字で「百日紅」と書きます。花期が長く百日にも渡って咲くためですね。ふつうの木では、成長すると樹皮の一部が割れたりはがれ落ちて、ゴツゴツとしたりいろいろなもようをつくってきますが、サルスベリではうすい樹皮じゆひが広くはがれおちて新しいものに置きかわることをくり返すため、つるつるしているのだそうです。冬は花や葉が少ないために、ふだんあまり見ようとしない冬芽や、樹皮などが目立ちますね。 【理科支援員 宮内】

樹皮じゆひがうすくはがれ落ちるため、幹みきがツルツルなサルスベリ。